



カイツブリ つがい数は維持 ヒナは減少

カイツブリは水草の茂みに巣をつくり、小魚などを食べる水鳥です。石神井池では2021年にかいぼり後、カイツブリの繁殖数が増えてきました。今号では今年度のモニタリングでわかったカイツブリの繁殖状況を報告します。

2024年の繁殖結果

2024年のカイツブリのつがい数は前年とほぼ同じ5つがい、ヒナのふ化数は前年の26羽から9羽に減少しました(図1)。つがい数は維持したものの、ヒナのふ化数はかいぼり前と同数でした。

かいぼり前、石神井池に生息していたカイツブリは2つがい以下でしたが、かいぼりによる外来魚駆除でカイツブリの生息環境が改善、生息数が回復したことで、かいぼり後には5〜6つがいに増加。石神井池は都内有数のカイツブリの繁殖地になりました。

ヒナ数減少の要因は食物量?

カイツブリのつがいやヒナの数にはさまざまな要因が影響します。個別では捕食者や人間活動、繁殖習熟度などが、池全体では気温などの環境や食物となる小魚やエビ類などの資源量が

要因になります。

モニタリングで確認した石神井池の在来魚・エビ類の捕獲数の推移(図2)を見ると、かいぼり後、特に魚が大幅に増加しています。かいぼりで駆除しきれなかった外来魚(オオクチバスやブルーギル)が再び繁殖している影響を受けてか、在来種の生息数は減少傾向にあることがわかります。カイツブリにとって食物となる資源量が減少していることを意味し、多数のヒナを育てられる状況ではなくなっている可能性があります。

これからも池のあちらこちらでヒナを連れたカイツブリの姿が見られるように、モニタリングと池環境改善の取組を継続して行っていく予定です。

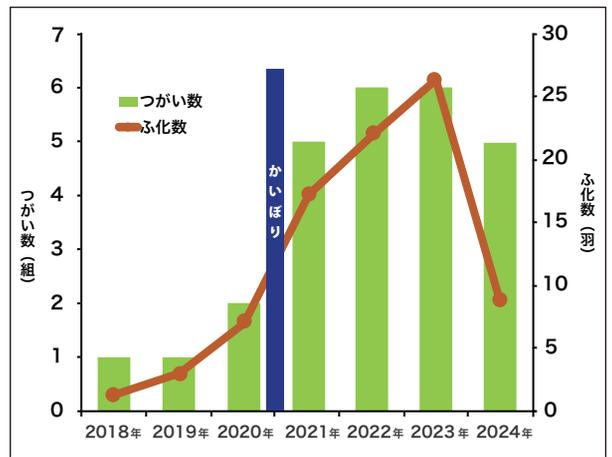


図1 石神井池のカイツブリの繁殖数

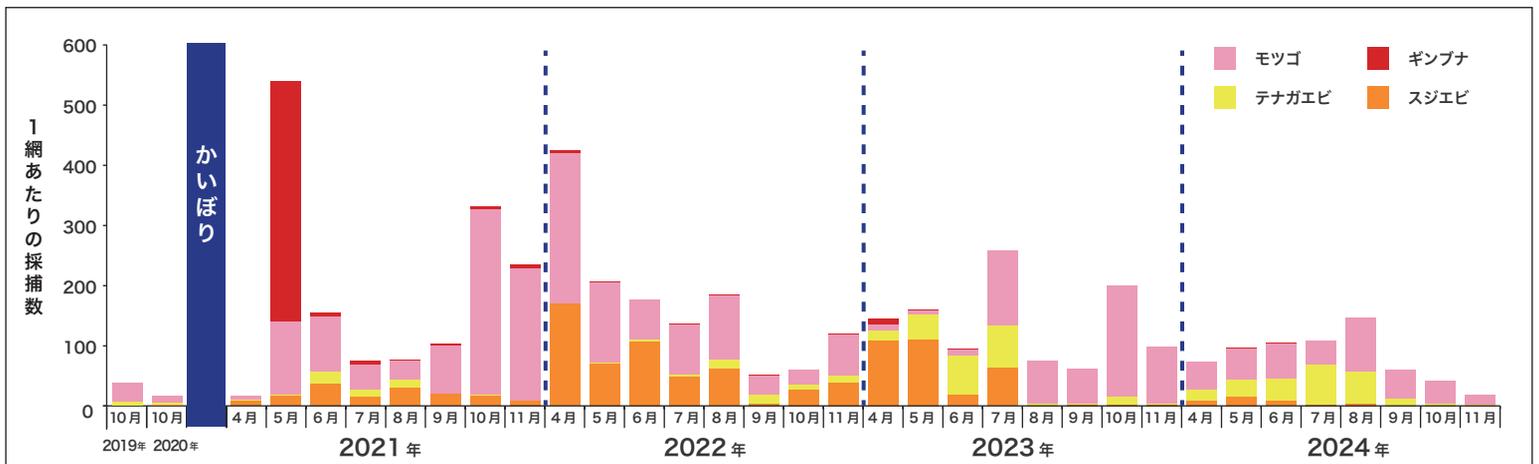


図2 石神井池の定置網1個あたりの在来魚等の捕獲数 ※このほか、ニホンウナギ、ドジョウ、クロダハゼが少数捕獲されました

ピックアップ! News

池周りのキショウブ、 抜き取り継続で大幅減!

キショウブは、地中に地下茎を張り巡らせて水辺に繁茂し、在来植物の生育空間を奪うことから生態系被害防止外来種リストに掲載されている植物です。石神井池の池畔には、土のない区間を除くほぼ全周にキショウブが繁茂していることから、2021年度に手作業による防除を開始しました。

この作業をしているのは、園内で活動している団体やボランティア、公園管理者など。草の中をか

き分けてキショウブを探し、地下茎を残さないように取り除いて数回の作業で池を一周します。数ヶ月後に、地下茎の断片や種子から再生したキショウブを再度取り除きます。月に一度の協働Dayのほか、作業イベントも開催して防除を進めています。

これまでの抜き取り作業で池を5周した結果、生育量が激減しました。さまざまな在来の湿生植物が生育する池畔を目指して、さらにキショウブを減らすべく作業を続けています。



キショウブが繁茂していた頃
(2022年5月)



減少後。在来種のマコモが優占し、キショウブは数本残るのみ (2024年5月)



キショウブの抜き取り作業



一日の作業で抜き取ったキショウブ。だいぶ減少しました (2024年5月)

しゃくじい自然図鑑

水草が多く広い水面のある川や湖、海辺などに渡ってくる冬鳥。練馬区周辺では数が少なく、見つけるとうれしい鳥です。今シーズンは石神井公園で数羽が越冬しました。

東京都レッドリスト
絶滅危惧ⅠB類(区部)



ヨシガモ

なんでココにカネヒラが?



石神井池で採取した
カネヒラ
(2024年10月)

放流はダメ!



タイリクバラタナゴの放流も確認されました

石神井池の水生生物モニタリングで、タナゴの一種「カネヒラ」が採集されました。近畿以西に自然分布している魚ですが、放流によって分布地が増え、東日本各地でも確認されるようになってきました。

タナゴ釣りを目的として、池や水路にタナゴ類を放流する事例が各地で問題になっていきます。タナゴ類のように、他の場所ので採った魚や飼育していた魚などの生物の放流は、在来種の生息に悪影響を及ぼすのでやめてください。放流行為を見かけたら公園サービスセンターに連絡してください。